

## VI 総括

### 1. 新潟県における近世火葬墳墓

新潟県における火葬墓の調査が行なわれるようにになったのは昭和30年代からのことで、偶然の発見からの調査で、調査された火葬墓のほとんどが古代から中世にかけてのものである。古代のものでは真野町大願寺遺跡、両津市羽吉遺跡がある。前者は土師器甕、後者は須恵器横瓶に火葬骨を納め埋葬されたものである。中世のものでは中条町韋駄天山遺跡、笛神村華報寺遺跡<sup>(註1)</sup>、小千谷市岡林遺跡<sup>(註2)</sup>、十日町市小黒沢遺跡<sup>(註3)</sup>、柿崎町金谷遺跡<sup>(註4)</sup>、上越市善光寺浜遺跡<sup>(註5)</sup>、栗島浦村観音堂遺跡<sup>(註6)</sup>、真野町真輪寺遺跡<sup>(註7)</sup>など8例がある。これらは火葬骨を甕に納め埋葬したもので、骨蔵器は珠洲系陶質甕・古瀬戸瓶子等が用いられており、片口、摺鉢、鉢などが蓋として組み合さっている。また華報寺伝高阿廟、真輪寺遺跡では石囲いの施設があったといわれ、華報寺遺跡からは骨蔵器に2個体以上の火葬骨と正安元年(1299年)の銘文のある経筒の納められたものが検出されている。このように古代から中世にかけての火葬墓の調査が進められ、埋葬についてある程度明らかになってきた。しかし近世墳墓については所有者が明確であるために調査の機会が得られず、民俗学的調査が中心となって進められてきた。このような中で、昭和47年に行われた大墓遺跡の発掘調査は、近世墳墓について新見地を与えた。

大墓遺跡は西蒲原郡黒崎町大字木場に所在する。規模は $5.7 \times 5 m$ 、高さ70cmの方形土壇状を呈する墳墓である。上層部からは近世骨蔵器群、下層には中世と推定される51個の火葬骨埋納穴群が検出された。近世の埋葬形態は1.骨蔵器に蓋石を伴うもの、2.骨蔵器が単独に埋納されたものに分けられ、埋納の形態としては1.蓋石を有するもの、2.蓋を伴うもの、3.蓋を伴わないもの、4.底部もしくは胴部穿穴のあるもの、5.入子になっているものの5タイプに分類されている。骨蔵器には各地の陶器が用いられ、器形、器種が変化に富んでおり、胴部に穿穴したと考えられるものが検出されている。また、蓋として用いられた器物には蓋、鉢、摺鉢、石があり、鉢、摺鉢は底部が穿穴されている。これら陶器は施釉陶器が用いられており、火消壺形の骨蔵器1点が素焼陶器である。埋葬の形態としては蓋石を有したり、骨蔵器、蓋に穿穴したりしているところから、旧態の埋葬形態を残している。また、骨蔵器に2個体の火葬骨を有するものがあるところから、両墓制的可能性をもつて考えられている。

以上が大墓遺跡の概要である。本墳墓の規模は $11.8 \times 13 m$ 、高さ約1mで、面積が大墓遺跡の約3倍で、墓域も明確である。墓域が明確であることは墳墓の周囲が水田と畑地の地目の差異からのものである。いずれにしても、これだけの規模を有するものは、両墳墓の周辺ではなく、両家が村落の中で大家であったことを示している。本墳墓の所有者である登坂家は江戸時

代から明治、大正にかけて質屋等を経営しており、庄屋であった清野家より大きな宅地、財力を有していたことである。埋葬形態では、1.骨蔵器を単独に埋納したもの、2.多く検出された板状切石から推定される。石囲いの施設に埋納されたと考えられるものの2形態に分類されるが、本調査において掘り返えされていたためこの2の形態は明確ではなかったが、改葬した中央部墓標下には、石囲いの中に骨蔵器が埋納されていたとのことで、近世でこのような施設を有するものは、武家の墳墓等に多くみられ、一般民衆のものまでは行われていなかつたものと思われ、墓標下に施設を伴うものはきわめてまれな例と考えられる。<sup>(註13)</sup> 埋納形態では骨蔵器がいずれも蓋を有していたと考えられ、骨蔵器は使用目的、すなわち骨蔵器としての目的を持って焼かれたものと、生活容器を2次的に使用したものがある。前者は素焼骨蔵器であり、後者は施釉骨蔵器である。また本墳墓で検出されている骨蔵器に穿穴の痕跡はないが、摺鉢、鉢を蓋としている点で旧態の姿をとどめているにすぎない。これは蓋に鉢、摺鉢を用いているという点で大墓遺跡と一致しているが、底部、胴部等に穿穴されていないという点では旧態の姿を留めておらず、骨蔵器としての目的をもって焼かれた容器が用いられてきていることから、現代的な埋葬形態に変化する過渡期としてとらえられる。

これら骨蔵器は一時期に埋葬されたものではないことはあたりまえのことである。登坂家は光照寺過去帳に正徳4年（1714年）から記載されているが、それ以前については光照寺が火災にあっているためわからない。過去帳に記載されているもののうち正徳4年（1714年）～明治33年（1900年）までの186年間に33人の葬儀が行われている。しかし、検出されている骨蔵器は本調査で5個、改葬したものを含めても10個に満たない。改葬した墓標が天保3年（1832年）であり、これから明治33年までは20人の葬儀が行われている。墓標が天保3年に建てられているところから、この墳墓の上限は天保3年頃と考えられる。この墓標下の埋納施設がどのようなものであったかはわからないが、改葬時の話からは1個の甕とボリ袋に入る量の焼骨ということである。天保3年3人、弘化年間に2人の葬儀が行われており、墓標下に埋葬されたものは多くて5人位ではなかったかと推定され、本調査で検出された骨蔵器はこれ以後の短期間に埋葬されたものと推定される。しかし、他の人の埋葬場所についての疑問が残り、大墓遺跡の両墓制を考えられるところから、本墳墓が宅地に近接していること、検出された個体が少ないこと等から、埋葬墓として使用された時期と、拌墓として使用され、別に埋葬した時期があったとも考えられるが、推定の域を出ることができず、今後の研究を待ちたい。

（本間信昭）

註1 椎名仙卓「佐渡出土の土師質骨蔵器」貝塚85・86合併号 昭和34年

2 椎名仙卓「横甕の骨蔵器」貝塚81号 昭和31年

3 斎藤正治「韋駄天山」蒲原 昭和46年

4 中川成夫・岡本勇『越後・華報寺中世墓址群の調査』立教大学文学部史学科調査報告4 昭和34年

5 文化財保護委員会編「宝鏡印塔形骨蔵器」（『埋蔵文化財要覧3』）昭和38年

- 6 中川成夫「十日町市小黒沢発見の正平在銘碑について」越佐研究第20集 昭和38年
- 7 室岡博・寺村光晴「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古 7 昭和37年
- 8 平野団三「中世墳墓の一様式」上越考古第2号 昭和39年
- 9 本間嘉晴・計良勝範「粟島の考古」（『粟島』新潟県文化財調査年報第11）昭和47年
- 10 新潟県教育委員会『新潟県考古遺跡要覧 I（佐渡編）』昭和34年
- 11 川上貞雄「正安元年在銘経筒の出土」水原郷土誌料第5集 昭和48年
- 12 戸根与八郎「西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告」（『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会）昭和48年
- 13 上野喜八郎氏の話による。
- 14 近世の埋葬には土葬と火葬が行われており、より土葬の例が多い。火葬の場合、骨蔵器を素掘の穴に埋納している例が多く、区画等の施設を有する例は中世墳墓に多い。しかし、武家の墓所調査では石室に棺を安置している。また燕、黒崎町附近の近世墓では、骨蔵器を埋納した上に墓標を立てており、口の部分が露呈しているものもあり、追葬できるようにしている例もある。  
『仏教考古学講座』第7巻墳墓 昭和50年  
河越逸行『掘り出された江戸時代』昭和50年

## 2. 出土陶器について

本墳墓から検出した陶磁器は素焼陶器、施釉陶器、磁器に分けられる。素焼陶器は甕、蓋、鉢の3器種で、いずれも成形、胎土、焼成が酷似しており、同じ窯場か同系統の窯場で焼かれたものと考えられるが、どこで焼かれたものかわからない。施釉陶器は甕、鉢、摺鉢、植木鉢、塹、皿その他の器種があり、いずれも日常雑器である。図版第12図4の甕に類似するものは、黒崎町大墓遺跡で骨蔵器として検出されており、九州の焼き物と推定される。図版第13図1の甕は佐賀県武雄古唐津南部系の松絵水甕と呼ばれているもので、白刷毛目の塗り上げで描いた波状文と鉄釉で描いた松絵が特徴となっている。武雄古唐津は慶長初期に開窯され、松絵の水甕は寛永末年頃から明治時代頃まで製作されたといわれる。<sup>(註2)</sup> 同じ武雄古唐津と推定されるものに図版第13図3の大鉢がある。白刷毛目の塗り上げの波状文が描かれている。この手法は弓野窯、小田志山窯、庭木山窯などにみられ、類似するものが大墓遺跡でも検出されている。図版第13図2の鉢は技法的には武雄古唐津に類似しているが、胎土が暗黄褐色を呈し、淡緑色の釉薬が全体にかけられている。植木鉢は海鼠釉がかけられており、海鼠釉は朝鮮唐津と呼ばれる佐賀県鬼子嶽帆柱窯、藤ノ川内窯、皿屋窯等で天正～寛永年間、佐賀県大河原窯、長崎県泣早山窯等で慶長年間に焼かれている。<sup>(註3)</sup> しかし、現在ではこの手法が東北地等各地で見られる。塹は灰釉がかけられており、胎土等から唐津系のものと推察される。これらの他に黄瀬戸系の壺片、薩摩系の甕片等が検出されている。

このように、本墳墓から検出された陶器は九州産のものが多く、他に東海地方のものがみられる。新潟県には九州産の陶磁器が大量に搬入されており、他に四国、東海地方の焼物が続いている。しかし、新潟県では近世になって佐渡、北蒲原、西蒲原、上越地方等に急速に窯業が